『長野県短期大学紀要』の最終号発行にあたって

長野県短期大学　副学長　横山憲長

本学の前身である長野県女子専門学校が1929年に創立し、戦後、1950年に長野県短期大学として新たに設置認可をうけ、文科と家政科の短大として発足した。61年には家政科が食物専攻と被服専攻に分離され、62年には児童科が、88年には教養学科が併設された。短大設置とともに毎年1号ずつ紀要が発行され、論文投稿の機会が与えられて、すでに72号に達している。しかしその伝統は、長野県立大学の発足によって今年度末に2学科5専攻が閉じられるのと軌を一にして遺憾ながら終焉する。紀要の最終号である73号の編集が企画されている現在、いままでの紀要を通覧する機会を与えられた。

長野県短期大学紀要規程において、紀要（発行）の目的として「教育研究活動等を公表することにより、その成果を本学の教育研究に還元するとともに広く学術の発展に寄与すること」とされている。紀要はそうした二つの目的を担うのみならず、大学のありようとして、近年は地域貢献が重視されており、紀要もその一環となる必要があろう。その投稿論文は執筆者・教員の専門性によっておおいに異なるため、論文内容の分類方法はさまざまあると思われるが、紀要（論文）を通読して、ひとつの手法として、教育への還元と地域への還元にしぼって次のように括ってみた。①被服、②食事、③長寿・高齢者、④山村・過疎・空洞化、⑤子ども、⑥学生、⑦情報・IT、⑧図書館、⑨歴史。

①については寒冷地着衣（27号）、エノキ茸の冷房作業服（40号）、県内子供服の洋装化（58号）についての研究がある。②は食物専攻に依拠するもので、研究課題は50年代の習慣食（1, 3号）から入り、そばの研究（10〜13号）、山村地帯の食事（33号）、食生活・食文化（38, 65, 67号）、長野市市街地の食生活（39号）、代表的な農産物りんご・干し柿（40号）、佐久鯉（62号）が研究対象となっている。生活習慣病予防（68号）、獣害との関係で鹿肉の研究（69号）、また、信州千曲ブランド認定商品の研究（69号）が報告されている。いずれも短大の地域連携・地域貢献の典型事例研究といえる。③・④について、まず県保健指導員体制は全国的にみて長野県の長寿と全国最低（に近い）老人医療費の根拠の一つとして解明しようとした（56号）。そのほか、農山村に入り込み、高齢者の実態と対応策（60, 61号）に、長野市内での空洞化対策にも取り組んでいる（70号）。いずれにしても、一方で農山村の高齢化にもとづく生活問題（65号）、農業の再編問題（61号）、人手不足を補うボランティアとニーズの齟齬（64号）など、今日抱えている諸問題に焦点が当てられている。⑤については児童科・幼児教育学科に負うところが大きい。70年に4論稿（24号）が掲載されたあと、86〜92年、保育実践・幼児期・幼児・保育・幼稚園関連の5〜7人によって担われた共同研究がある（41〜47号）。付属幼稚園の閉園（2017年3月）を前にして「存続危機」論文（57号）に予兆がみられており、閉園前における幼稚園スタッフの総力をあげたその存在意義の誇示ともいえよう。そのほか、健康栄養専攻スタッフがおこなった、保育園の歩数調査結果と運動量との相関研究（67号）は②ともかかわる領域のものであり、ホームスタート（70号）は親自身の心の安定を支援するボランティア活動（長野市内）である。キッズを対象としたプログラミング体験は情報化社会への動機づけ、適応能力の伸長を目ざしている（72号）。⑥について、学生を対象とした精神的な問題（25号）、各種障害の研究（43号ほか）は今日、深刻な問題である。②とも関連するが、給食管理実習・食生活実態調査等（45号）がある。他方、学生の授業評価について、授業評価で授業の「質」の向上は可能かという問題提起がある（69号）。またインターンシップに関して、それをカリキュラムにどう位置づけるか、大学・企業・行政・地域とどう連携していくかを提起している（69号）。⑦1988年以来教養学科の情報教育変遷をかえりみて、課題としてWebシステムを有効に活用することによって学生のレベルに応じた演習・支援を行いたいとする（48, 59号）。また、そうした時期にパソコン通信を利用したCD情報検索が効率的に可能となったことの紹介もある（48号）。近年ではアルゴリズム的思考方法のための教育支援ツールの導入を試み、どのような授業展開のなかでツールを利用したらよいかが課題となっている（66号）。⑧女専時代に教鞭をとった布村安広教授が昭和10年に寄贈した文献74点ほかと和歌・俳諧・俳文104の文献の改題（48, 49号）、それを受けて、『源氏物語』写本の内容を検討した結果、河内本との交渉を考える上で有意な資料と位置付けられた（54号）。この作業によって本学所蔵和書が日の目を見ることができ、それらはデータベース化され検索可能になった（64号）。⑨地域の歴史については、地域文化の向上を目指してさまざまなテーマで取り組まれている。子守り学校（20号）、自由民権・普選運動（27号）、小諸義塾（53号）、県同仁会（32号）、伊那地方近世被服

規制（38 号）、相馬黒光（49 号）・中村屋（51 号）、長野軍政部（54 号）、鷹匠の文化（71 号）等、枚挙にいとまがない。

これ以外に、純粋文学（25, 27, 37, 39, 50, 53, 55 号等）、哲学（24, 29, 38, 41, 70 号等）、言語学（26, 37, 53, 69 号等）、生物学（37 号等）、貧困・福祉（57, 63, 71 号等）等に関して、いずれも高い水準の研究成果が掲載されており、各学会における研究水準の向上に資した役割はいうまでもない。

紀要の表紙には、第 24 号・1970 年 1 月刊・創立 40 周年記念号、第 34 号・1980 年 3 月刊・50 周年記念号、第 44 号・1989 年 12 月刊・60 周年記念号、第 54 号・1999 年 12 月刊・70 周年記念号、第 64 号・2009 年 12 月刊・80 周年記念号と明記されている。

紀要の投稿数は、10 号までは 10 本（論文）以下であったが、その後、20 本以上の号を掲げると、第 24 号・22 本、39 号 20 本、42 号 22 本、43 号 25 本、44 号 24 本、46 号 20 本、50 号 21 本が該当し、教員数からすれば、意欲的な姿勢がうかがえる。ここに紀要の存在意義を読み取ることが出来る。

紀要のサイズは 11 号までは A5 判で、12 号（1958 年 2 月）から A4 判に大判化された。